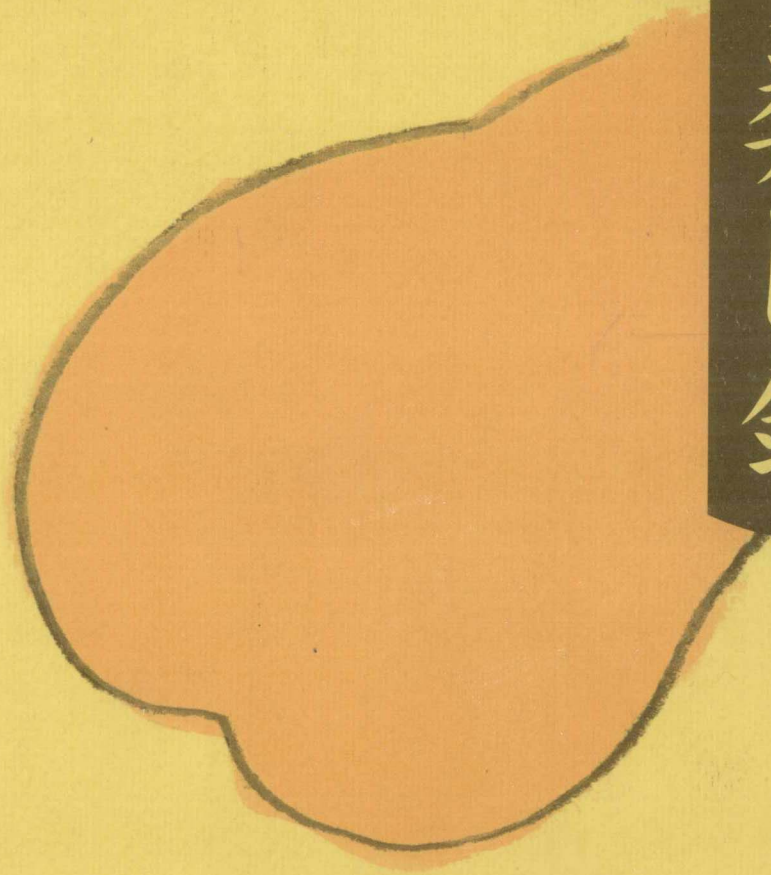
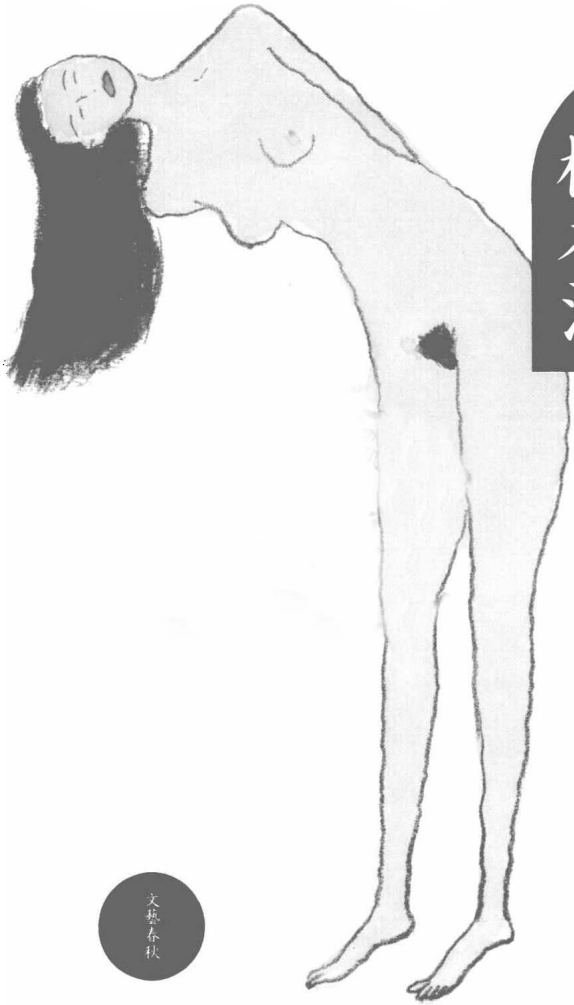
絶滅女類図鑑

橋本治



絶滅女類図鑑

橋本治



文藝春秋

著者紹介

橋本治（はしもと　おさむ）

一九四八年東京生まれ。東京大学文学部在学中に、東大駒場祭のポスターでイラストレーターとして注目を集める。一九七七年に『桃尻娘』（講談社文庫）で作家デビュー。以後、小説、評論、エッセイ、古典の現代語訳、舞台脚本等、あらゆるジャンルに精力的な執筆活動を続ける。近著に『窯変源氏物語（全一四巻）』『源氏供養（上下巻）』（中央公論社）『ぼくらのＳＥＸ』（集英社）『ぬえの名前』（岩波書店）『貧乏は正しい！』（小学館）『月食――ＲＡＨＵ』（河出書房新社）などがある。

絶滅女類図鑑

一九九四年四月一日第一刷

定価はカバーに表示してあります

著者　橋本治

発行者　堤　堯

発行所　株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三―二三
電話　東京〇三―三二六五―一二一一
郵便番号　一〇二

印刷所　大日本印刷

製本所　加藤製本

万一、落丁乱丁の場合は送料当方負担でお取替え致します。小社営業部宛お送り下さい。

1,800円

© Osamu Hashimoto 1994

ISBN4-16-348870-7

Printed in Japan

絶滅女類図鑑　目次

まえがき 7

第1章

W浅野はもういらない〈表〉 24

W浅野はもういらない〈裏〉 34

第2章

団塊のオールドミスは土井たか子になれるか？〈表〉 48

団塊女が嫌われる〈裏〉 58

第3章

火事場泥棒的ボディコン論〈表〉 82

ボディコンは絶望する〈裏〉 93

第4章

笑ふ女〈表〉 106

健康ギャルは不思議に笑う〈裏〉 116

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第5章
女のオタク〈表〉 132
「女のオタク」はいるか〈裏〉 142
第6章
関寺小町1990〈表〉 146
カワイイおばあちゃんになれる？〈裏〉 156
第7章
書きますか？〈表〉 174
「女流作家」はアバルトヘイト？〈裏〉 185
第8章
声も丸文字、頭も丸文字……〈表〉 188
声も丸文字、頭も丸文字……〈裏〉 198
第9章
色気がない！〈表〉 220
男よりも色気がない？〈裏〉 231

第10章
ファースト・レディ、あんたが勘違い〈表〉 252
ファースト・レディ、あんたが勘違い〈裏〉 263
女スチャラカ社員の明日はどっちだ〈表〉 278
女スチャラカ社員の明日はどっちだ〈裏〉 290
第11章
パンツが臭くておかしいか？〈表〉 294
パンツのウラオモテ〈裏〉 305
第12章
男はどうしようもなくつまんない〈表〉 318
どうして女は「こざかしい」になるか〈裏〉 329
第13章
どうしてゲイが好き？〈表〉 342
いまどきの女はすでにしてゲイである〈裏〉 349
第14章

絶滅女類図鑑

まえがき

1

この本のもとになった原稿『絶滅女類図鑑』は、1989年の秋に創刊された女性誌『CREA』に連載されたものです。連載は、創刊12月号から13回続きました。なんでそんなに半端な数なのかというと、創刊が12月号だからです。創刊号＋一年間＝13です。それで「やれやれ」と思っていたら、連載が終わった一ヵ月後に、今度は「女性誌で初めてゲイの特集をやるから、なんか喋れ」というので、「まァ、ついでだから」と思ってやって、その分も含めて、この本の構成は14章から成ります。

さて、この本のタイトルの由来です。『CREA』に連載されたものを単行本にするにあたって、「タイトルをもう一度考えてくれないか」という話は、当然のことながらありました。「あんまり売れそうもないタイトルではあるし、なんだか、あまりにもあんまりだ」というところなんでしょう。『CREA』で連載を始める時も、このタイトルには、「ちょっと考えさせてくださ

い」という、編集部サイドの保留がつきました。やっぱしこれは、すんなりと通るようなタイトルではないのでしょう。がしかし、私はヤです。これはこういうものなので、『絶滅女類図鑑』のままで押し通しました。なんでそうなのかという、このタイトルの由来です――。

2

『絶滅女類図鑑』というタイトルのイメージには、〝恐竜〟があります。「絶滅してしまった恐竜とおんなじように、〝女〟というものも絶滅してしまった――あるいは、やがて絶滅してしまうであろう」という意味です。

〝女〟というものは、変わりました。そのことだけは、誰でも知っている。知っていてしかし、「その変わってしまった〝女〟と、どうつきあっていったらいいのか？」ということになると、誰にも分かりません。男は分からないし、当の女にだって分かっていないでしょう。あるいはもしかしたら、分かろうとしていないのかもしれません。

〝女〟というものは、衣装のようだった。変わってしまって、そのことを自覚している人間にだけは、それがよく分かった。「古い上着よ　さようなら」で、もう古くなってしまった〝女〟という衣装を脱ぎ捨てて、さてしかし、そうであっても、女が女であることに変わりはなかった。〝女〟を脱ぎ捨てた女にとって、〝新しい衣装〟というのはなんなのか？

女の新しい衣装は〝男〟なのか？

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

あるいはそうかもしれない。しかしあるいはそうではないかもしれない。

というのは、女が旧来の〝女〟という衣装を脱ぎ捨ててしまったら、〝男〟というものだって、古い過去の衣装の一つにしかすぎないことになるから。

女にも衣装はないし、男にも衣装はない。なくてしかし、〝衣装〟というものは、やっぱり必要で、人間の性が〝女〟と〝男〟の二つしかなかったら、その衣装もやはり〝女〟と〝男〟の二つしかない。混乱というのは、そこからしか起こらないものでしょう。

が、さてしかし、そんなことはどうでもいい——というよりも、そんなことは早すぎる。早すぎてせっかちで、話をそんな方向に飛ばしちゃったら、事態がややこしくなるだけだ。

「女はどうあるべきか？　だから従って、男もどうあるべきか？」へ行く前に、「どうしてそんなことを考えなくちゃいけないのか？」というハードルが、まだまだクリアーされずに残っている。

なんでそんなことを考えなくちゃいけないのか？

〝自分〟というものがどんなものであるのかもよく分からないというのに、なんでまた、「女はどうあるべきか？　男はどうあるべきか？」なんてことを考えなくちゃならないのか？——ということだってあるんですね。

なんでそんな急に、「新しいあり方」なんてものを考えなくちゃいけないのか？

それは、今までの〝女であること〟〝男であること〟が、もう役目を終えて意味がなくなってしまったからですね。つまり、重要なことは、「もう終わってしまった」ということ。

その線路が終点になってしまったから、乗り換えということをしなくてはならない。終点に着いても、停まったままの列車に乗っているのは、バカだ。それと同時に、「終点」ということばかりに気をとられて、まだ終点に着いてもいないのに、走っている列車から飛び降りてしまうのもバカだ。

終点に着いて、その先に線路がなかったら、その先は自分の足で歩かなければならない。と同時に、まだ終点に着かない先に飛び降りてしまった人間も、もうそこから先は自分の足で歩いて行かなければならない。列車の中から道端に飛び降りて、そこから歩き出しもせず、ただ自分を運んでくれる何かが来るのを待っているのもバカだ。そして、なんでそんなバカなことになるのかといえば、それは、そこでボサーッとしてイライラしている人間の中に、「自分は自分の意志で、走っている列車から飛び降りた」という自覚が抜け落ちているからだ。途中で飛び降りたとしても、とりあえず終点までは行って、「ああ、なるほど、それだから自分はあそこでせっかちにも飛び降りてしまったのか」ということぐらいは確認した方がいい。

「終わってしまった」という認識は、結構重要なことだ。それがなければ、その先が始まらない。始まらないのは、だから当然、「もう終わってしまった」という自覚がないからだろうと、新し

い女性誌『CREA』が創刊される1989年の秋に、私は勝手に考えていた。

「女というものは変わってしまった。だから、旧来の〝女〟というものも終わってしまった。これから先は、その旧来の〝女〟にただ漫然と寄っかかっていてもしかたがないだろう」というのは、今となってはいたって簡単なことで、しかしその頃には、まだまだ十分に〝厄介な事実〟だった。

「もう終わってしまったのかもしれない……」——あるいは、「ひょっとして、もう終わってしまうのかもしれない……」ということだけは分かって、でもその先の用意というものがなかったら、どうなるだろう？

「その先に関しては自信がないから、まだ終わっていない、まだ当分は終わらないということにしておこう」ということになる。1989年秋の女状況の中途半端さは、これだっただろう。あるいは、「いよいよこれから中途半端になるだろう」というような、1989年秋の状況であったのかもしれない。そしてあるいは、このことは、もしかしたら今でもまだ続いているような状況であるのかもしれない。

外の状況はさておき、私としては、「終わった」ということだけをはっきりさせておきたかった。「〝変わった〟のではない。〝変わる〟ことによって、もう今までのものは〝終わってしまった〟のだ」ということだけを、まずはっきりさせたかった。女という線路に停まっている列車が不思議に動かないままでいることの意味ぐらいは、その線路の横を歩いていた私には分かったよ

うな気がした。
男の線路の上を走る列車がもう終点に来ているような気がして、しかしにもかかわらず女の線路の上を走る列車だけが動いているのは、なんだかヘンだった。
「男の列車が終点に来ているのなら、女の列車だって早晩終点にたどり着くはずなのに、そうなっていないのは、〝男の列車が終点に来ている〟という私の認識が間違っているからかもしれない」と思って、しかしもう男という列車には乗りようがなくて、まだ走っている女という不思議な列車に乗って、「これは〝走っている〟というのではない。〝ブレーキ〟という発想がないだけだ」と思った。
比喩はともかく、私にとって、「〝男〟がもうとうの昔に終わってしまっている以上、〝女〟だけが終わらないでいる」ということは、とてもヘンなことだった。「変わった」ばかりがあって、〝変わった〟と言われる以上、どこかで〝もう終わっている〟もあるはずなのに、その「終わった」という確認がないままでいるのが、私にはとてもヘンだと思われた。「変わった」と言うことはイエスで、「終わった」と言うのがタブーであるようなのは、とてもヘンだった。
そのことを呑み込まないでいることが、どんなにヘンなことなのか。そして、そのヘンがまかり通っても不思議がないくらい、「終わった」ということを認識するのは難しいことらしい、というのが、私にとっての1989年秋の女状況だった。だから、創刊される新しい女性誌の連載につけるタイトルは、『絶滅女類図鑑』しかなかった。「どうやら向こうもそれをこちらに書かせたいらしい」ということは分かって、だから私は、その連載に『絶滅女類図鑑』という、とつ

きにくいタイトルをつけた。

それが、ミもフタもないくらいに、〝女への愛情〟というものとは縁のない、ヘンなニュアンスを籠められたものであるというぐらい、私は重々承知していた。

「女性誌で、そんな風に読者を拒絶するようなタイトルをつけてしまってもいいものかどうか？」と。

まだ終わったか終わってないかもよく分かられていない段階で、「もう終わった」などと高飛車な断定を下されることは、とても不愉快だ。はっきり言って、これは、〝女〟に対する「生きながらの埋葬」なのだから。

がしかし、それでも、「終わってしまったものは終わってしまったもの」と思う私は、『絶滅女類図鑑』を主張した。でなければいやだと言う私は、「さっさとこの先を生きたい」と思っていた私だからだ。

3

さて、女は変わった。それだから、「旧来の女はもう〝女〟になってしまった」と言う。女は〝女〟になって、男は〝男〟になって、でも、女が〝女〟になって、男が〝男〟になったとしたって、やっぱり女は女なんだし、男は男なんだから、その間の変化をはっきりと「終わった」と言わなければ、この〝女〟や〝男〟だって、やがてはまた〝古い衣装〟に変わってしまうだろう。「新しい女」だの「新しい男」だのということをやっていて、でも気がついたら、いつの間にか、

これだって所詮よくある〝流行〟の一つに変わってしまう。衣服の流行と同じように、「ありかたの流行」だって、ちゃんとあるのだから。

すべては流行――即ち一時的な風俗になってしまって、ある理由があって〝女〟というものが変わってしまった――だから、変わって古くなってしまったものを脱ぎ捨てなければならなくなったという重大な事実は、どこかへ行ってしまう。まァ、そうなることを待っている鈍感で保守的な人間だっているだろうけれども、残念ながら、女の変化というものは、風俗的な変化や流行ではない。もっと人間社会の根本にかかわってくるような、大変化だった。とんでもない大変化だから、「それがどれくらいの大変化なのか」ということだって、ピンとこない。そんな「大変化」の質を知るためにも、「終わった」という計測が必要なんじゃないかと私は思うんだが、どうだろう？

「〝女〟という衣装が古くなることによって、何が変わったか？」――存外こういうことが考えられていない。簡単には分からないぐらいの大変化は、こういうことの答を、簡単に出させてはくれない。

「〝女〟という衣装が古くなることによって、何が変わったか？」――よく分からない。だから、この〝裏〟を考えてみよう。この〝裏〟とは、「〝女〟という古い衣装を相変わらず握りしめていることによって、どんなトクがあるか？」だ。きっとなにかのトクがあるから、〝女〟はまだ終わってはいないのだ。それは、女にとってのトクでもあるし、男にとってのトクでもあるはずだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com